「古典」は、「国語Ⅰ」の中に、どう「総合」されたか

加藤宏文

はじめに

「国語Ⅰ」が、出発した。「教室」には、主体的な創意工夫が、ひときわ求められている。にもかかわらず、広がっているのは、とまどいである。ことは「総合」の意義にこそある。

かつて、一九六二年、高橋和夫氏は「現代国語」・「古典」の出発にあたって、時の「とまどい」の本質を、鋭く指摘された。(注1) そこでの「現代国語」の去就の論は、今や、「古典」のそれに処を変えたと言うべきか。

わたしは「出発」に先立ち、右の見解をふまえて、主題による「統合」を唱えた。(注2) 「現代国語」・「古典」は「国語」として、そう「総合」されるべきだと考えた。「出発」にあたり、「創意工夫」の礎を、みすえたく思う。

以下は、アンケートの結果を中心にした考である。対象は、一九八二年度第一学期末、大阪府立高校普通科国語担当者、各校一名(四世代任意に三〇名宛)である。さまざまな「総合」観に、教えられ、実践の糧としたい。

一 「国語Ⅰ」の性格と「古典」

「国語Ⅰ」には、三つの新しい性格がある。

① 小・中学校との関連の強調

② 内容の基礎的・基本的編成

③ 言語の教育であることの強調

わたしは、右に即して、こう問うた。

一 科目「国語Ⅰ」の性格のひとつは、中学校での国語教育との〝関連〟にあるとされています。扱われた教科書・ご覧になった教科書で「古典」教材は、学習者の実態に即して、その点では、1 十分工夫されている。2 まずまず工夫されている。3 ほとんど工夫されていないから、独自の工夫を凝らしている。4 〝関連〟自体、実態にそぐわない。

二 そのふたつは、〝基礎的・基本的〟内容にあるとされています。同様に、その点は、1 十分工夫されている。2 まずまず工夫されている。3 ほとんど工夫されていないから、独自の工夫を凝らしている。4 その意味があいまいである。5 それ自体誤っている。

三 もうひとつは、〝言語の教育としての立場〟が貫かれていること

とです。同様、「古典」教材では、具体的には、どんなところに、それが反映していると思いますか。一項目、示してください。

四　以上の三つの点について、どう見てとりますか。つぎの中から、ふたつ選んでください。

1　「国語甲」に逆もどりである。2　「現代国語」・「古典」での実績が生かされていない。3　組織的・体系的指導がしにくい。4　「国語甲」とは本質的に違い、実態に即している。5　組織的・体系的指導がしやすい。6　「現代国語」・「古典」での実績が生かされている。

右の結果は、〈表1〉の通りである。回答者数は、三五（二〇代五、三〇代九、四〇代九、五〇以上一二）であった。（以下同じ。）

<表1>

問肢	一 1	一 2	一 3	一 4	一 無答	二 1	二 2
20代	0	2	1	1	0	0	1
30代	0	6	0	4	0	0	6
40代	0	3	4	0	2	0	3
50以上	0	4	3	4	1	0	4
合計	0	15	8	9	3	0	14

<表1>

二 3	二 4	二 5	二 無答	三 無答	四 1	四 2	四 3	四 4	四 5	四 6	四 無答
1	3	0	0	2	1	1	3	0	0	1	1
1	2	1	0	5	1	1	4	1	2	0	2
2	3	1	0	6	2	3	5	1	0	1	2
4	3	1	0	8	3	7	7	1	0	0	3
7	11	3	0	21	7	14	19	3	2	2	8

まず、〝関連〟の問題については、一五名が、「まずまず工夫されている。」とはしている。しかし、否定的な回答の合計も、一七に及ぶ。

この項については、なお、つぎのような意見が添えられている。まず、肯定的例である。

(1)　従来に比べて、教材（特に入門期）がやさしくなっている傾向があります。（二〇代）

(2) 教材のひとつひとつの level については中学校の教科書との連続がはかられている。(三〇代)

(3) わかりやすい教材も含んでいる。(三〇代)

また、反面、つぎのような否定的な意見もが、散見される。耳を傾けねばならない。

(4) 入門期にそぐわない教科書だったので、プリントによるさしかえをした。(三〇代)

(5) 但し中学校での古典は殆ど消化されていないと思う。(二〇代)

さらに、つぎのような意見にも注目される。

(6) 教科書は、工夫されているが、国語Ⅰを教える高校側の準備が出来ていない。(三〇代)

(7) 中学校と実際に連絡協議をすることが必要である。

言うまでもなく、〝関連〟が、今までにも、なかったわけではない。また、断たれてよいわけでもない。しかし、学習内容の〝関連〟の視点からの改革が、単なる平行移動であるとしたら、事なかれ主義の謗りを免れはしない。

中学校には、中学生の世代にふさわしい内容と体系とが、時代を越えてある。高等学校にも、同様に、当然必要であるはずである。「基礎学力低下」の論が、この両者の独自性をも無視するものならば、〝関連〟は生きない。

このことをおさえた上で、わたしたちは、(6)・(7)に教えられ、〝関連〟の理論的考察と、地域に密着した実践が、積み重ねられるよう、努めねばならない。(注3) とりわけ、この大阪の制度下においては、右は焦眉の急である。

つぎに、〝基礎的・基本的〟の問題についてである。ここでも、見解は、大きく分かれる。添えられた意見は、つぎのようである。

(1) 何をもって「基本」とするか。(五〇代)

(2) 語句の意味・用法を理解し語彙を豊かにする。(二〇代)

(3) 文章が易しい、という点においてはそう言える。(三〇代)

(4) ただし、私の高校では高すぎる。(三〇代)

まず、(1)の指摘からは、技能レベルでの安易な便宜主義への傾斜が反省される。また、(2)・(3)の指摘からは、現実を見すえながら、なおかつ、〝基礎的・基本的〟の、高校生にとって普遍・独自の意味が、求められてくる。

そこには、厳しい地域の実情や学校の実態がある。その中にあっての、高校生の動態としての生活が、ふまえられねばならない。高校生が共鳴し驚くことによって内実を深める、教材への確かな視点が、求められる。

三つ目は、〝言語の教育〟の問題についてである。ここでは、無回答が、二一名にものぼった。発問のあり方を反省しなければならない。自戒の上で、添えられた意見に、耳を傾けてみよう。受け止め方に、教えられる。

(1) 「枕草子」の原文のみならず鑑賞文がついていたところ。(二〇代)

(2) 近世のものを新しくとりいれている。→現代国語と関連させる。(三〇代)

(3) ex. 三省堂のこくごの研究のような series がある。それは反映しているとみられる。(三〇代)

(4) 「平家物語」で擬声語擬態語を指摘し、内容の躍動感をとらえさせようとしている。(四〇代)

〝言語の教育〟という性格は、かくもさまざまな次元で受け止められている。わたしたちは、この点について、益田勝美氏が鋭く指摘しておられるつぎの次元にも、教えられたい。その上で、観点を深め合いたい。

○ 文学の最大の効用は、一見直接的でないように見えるところ、実に多くのことばが、読み手のわれわれのなかに入りこみ、容赦なく眠りこけてしまう、という点にあるのではないか。内なる言語の眠り、言語の蓄積に思いあたるとき、言語の教育を文学ぬきで実用語講習として進めることは、民族文化滅滅の陰謀とさえいいたくなる。

現在の国語教育なるものの、戦後一貫しての欠陥は、内なる言語をたくわえるためのいとなみ、速効的肥料とは似ても似つかない遅効性の土質改良のいとなみとしての、言語教育と文学との重なりあいを、捕捉しえなかったところであろう。(注4)

さらに、つぎのような意見も、添えられた。

(5) 言語教育の定義が曖昧と思う。(二〇代)

(6) 教材より教授法の問題ではないか。(五〇代)

〝言語の教育〟とは。——わたしたちは、さきの二つの前提として、究めねばならない。

一方で、言語を「社会」の「要請」に応えての、形式的に使いこなせる知識や技能に集約してとらえる見解がある。わたしたちは、今、そうでのみあってはならないことを、右の意見に触発されて、確かめねばならない。

以上の三つの性格は、四つ目に、出発の具体の中で、どう評価されているか。

まずは、「指導しにくい」の一九名をはじめとして「逆もどり」をも含めると、否定的な評価が、七〇分の四〇にまで及ぶ。はっきりとした肯定的評価は、極めて少ない。

(1) 学校差があるから解答はむずかしい。教材…文法教授のweightが高いのは本校では困難である。(三〇代)

(2) 「総合」の観点があいまいである。(三〇代)

(3) 私の学校では、ほとんど文法を教えることができないので、改訂によるプラス面はあると思います。(三〇代)

(4) 文学的な感情や雰囲気をとらえる面において体系的である。(三〇代)

(5) 古典の読解を出来るようにするためには、体系的ではない。(三〇代)

右のようである。

① 能力主義から人間性の重視へ。

② 精選とゆとりを。

③ 基礎的なことがらの重視へ。

④ 「表現力」の養成を。

わたしたちは「国語Ⅰ」の出発にあたって、この四点を目標とする。そのとき、さきの三つの性格は、つぎの三点を、要求する。

① 地域の中での国語教育の位置づけ。

② 高校生にふさわしい基礎・基本の開発。

③ 言語の教育の具体的な方法化。

「総合」された中で、「古典」の右におけるありようは、どれひとつとっても、重い。それぞれの「教室」での苦闘を前にして、それは、大きな壁とさえ見えてくる。しかし、どれひとつを抜きにしても、わたしたちの「教室」は、その存在の根底を揺さぶられる。

二 「国語Ⅰ」の実践と「古典」

「国語Ⅰ」は、「教室」で、どう出発したか。

五 さて、貴校では、本年度第一学年での「国語Ⅰ」を、どう実践してこられましたか。つぎの点、ご記入ください。

イ 単位数 ロ その担当者数

また、担当の形態は、どうですか。

1 旧「現代国語」・旧「古典」に分けている。2 単元によって、総合のまま分けている。3 「古典」は、さらに、「古文」・「漢文」に分けている。4 その他

六 その形態では、「古典」教材の入門期における学習は、効率性や体系性の点で、どうでしょうか。

1 「総合」の意義が生かせている。2 従来と変わらなくなった。

なお、五のイ・ロについては、特にロにおいて、イとの関連を抜きにしての回答が、かなりにのぼった。当方の手落ちであったため、〈表2〉からは、やむなく割愛をした。

まず、担当の形態についてである。そこでは、二六名が、「分けている。」し、うち、一一名は、「漢文」をも、「古文」とそうしている。

<表2>

問	五					六		
肢	1	2	3	4	無答	1	2	無答
20代	5	0	1	0	0	0	5	0
30代	7	0	4	0	1	0	7	2
40代	5	0	3	1	2	0	6	3
50以上	9	1	3	0	2	0	10	2
合計	26	1	11	1	5	0	28	7

文字通りの「総合」は、一名に過ぎない。

(1) 時間数の関係で、どうしても古典と現代文をわけざるを得ない。(三〇代)

(2) 5単位×10クラスだから、「総合」の意義を生かすためには5人は多い。せめて四人。(三〇代)

(3) 来年は総合（一人の担当者で一クラスの国語を担当する。）でいこうと話し合っている。(四〇代)

(4) 一人で持つのに生徒を把握する点で難点あり来年からは二人で……という説もあるが考慮中。(五〇代)

右には、模索しながら、いくつかの現実的・技術的な壁にぶつか

っている実情が、よくわかる。わたしたちは「分けて『総合』は成り立つのか。」の原点から、もういちど「教室」を問い直し「成り立つ」軸を確認し合いたい。

つぎに、形態と入門期での効率性・体系性についてである。回答のすべて、二八名までが「従来と変わらなくなった。」である。たとえば、これに添えられた意見は、こうである。

(5) 体系性の点では「総合」の意義が少しは生かせたと思うが、文法学習においては教材が不充分・不適格な場合がある。(三〇代)

(6) level は down してていねいにやっているようである。(三〇代)

(7) 昔より入門期が大事になってきた。(三〇代)

(8) 教師の内に保守的な傾向（新しい観点に切りかえられない）があるのも一因。(三〇代)

ここには、文法学習体系再検討の声が、まずはある。わたしたちは、既成の体系に学びながらも、文法学習を中心とした入門期の学習方法を「表現」と「理解」との「統合」の中での価値学習に直結させ、開拓したい。

三　「古典」教育の反省

三つの性格をふまえ、実践のあるべき姿を模索する。そのとき、わたしたちは、従来の「古典」の「教室」が、どのようにありえてきているかを、謙虚に省みなければならない。

七　ところで、〝総合〟の形を選ぶことによって「古典」はやっと生き残った〟という見方があります。

1　そんなことはない。2　そのとおりである。3　そうとも言える。

八　さらに、従来の「古典」教育については、つぎのような批判がなされてきています。共鳴されるものがあれば、選んでください。

1　いわゆる「文法」教育偏重　2　単なる解釈作業　3　入試のための技術一辺倒　4　作品選択基準の専門化　5　批判は、いずれも当たらない。6　再検討の余地はある。

<表3>

問	七				八						
肢	1	2	3	無答	1	2	3	4	5	6	無答
20代	3	0	2	0	0	4	0	0	0	1	0
30代	4	0	4	0	5	2	1	2	2	3	1
40代	4	0	2	3	2	3	1	0	1	3	2
50以上	3	1	4	3	1	5	2	0	2	4	2
合計	14	1	12	6	8	14	4	2	5	11	5

まず、七については「そんなことはない。」が、一四名「そうとも言える。」が、一二名である。この点についての見解は、この両者に二分されていると言える。ちなみに、積極的に肯定する例は、一名だけである。

(1) 全体のカリキュラムとの関連もあって選択に追いやられる傾向があるようです。(二〇代)

(2) 受験校と一般の高校と同じ教科書や単位を画一にする所に問題があります。(三〇代)

(3) 受験のためだけ教えていたら、理系（私立）など不要である。(三〇代)

これらは、それぞれの条件のもとで、現実に「そうとも言える。」具体的な面を、直視しての意見であろう。たとえば、(1)は「国語Ⅰ」の出発そのものが、技術的な面からとは言え、「総合」の名のもとに「古典」の運命を決定すると見ている。また、(2)は「教室」の実態に密着しての発言である。さらに、(3)は、制度のひとり歩きが、ついには陥る可能性への逆説的な警告とも受け止めることができる。一方、つぎのような角度からの反発もある。

(4) 生き残るとか生き残らないとかいう観点がナンセンスである。(三〇代)

(5) 古典なしで日本語教育など考えられない。(三〇代)

これらは「国語1」の「出発」を、従前からの揺ぎない理念を尺度に、高所からみすえたもののようである。わたしたちの「教室」では、確かに、この理念こそが、どんな実態の中ででも、貫かれなければならない。しかし、日々押し寄せるもの多い「教室」がある。そこでは、同時に、貫きがたい事実への思いを、否むことができない。さきの(1)～(3)は、そういう次元からの切実な思いが、その背後に重くある「教室」が見えてくる。

こう教えられると、わたしたちは、右の二つのどの次元からも、「教室」そのものが、今こそ、力量を持たねばならないことを自覚する。それぞれが独自に自立できる、価値学習をみすえての学習内容と体系の確立である。

四　「古典」と「総合」

右のような「理念」と「実態」との狭間にあって、わたしは、わたし自身の体系の骨子について、こう提起し、批正を仰いだ。(注5)

九　そこで「総合」の中で「古典」を生かし切るために、つぎの提案をいたします。意義を認められる項には○、意義は認められない、反対だとされる項には×を、それぞれご記入ください。

1（　）旧「現代国語」に「古典」をひきつけ、現代を生かす。

2（　）主題に基づく単元をその軸とし、両者を統合する。3（　）そこでは「表現」・「理解」・「言語事項」の統合も可能である。4（　）「古典」の「精選」の視点を転換し、教材開発に努めねばならない。

右についての回答結果は、〈表4〉（次頁表4参照）の通りである。概して、1・2および4については、その意義を認める回答が、認めないものよりも、遙かに多い点は、注目すべきであろう。

しかし、ひとつには、同時に、無回答例もまた極めて多くにのぼっている。ふたつには、3については、理解と支持とが、ごくわず

<表4>

問	九											
肢	1			2			3			4		
	○	×	無答	○	×	無答	○	×	無答	○	×	無答
20代	2	3	0	2	2	1	1	3	1	4	0	1
30代	3	1	5	6	1	2	3	1	4	5	0	3
40代	2	1	6	4	2	3	2	2	5	5	0	4
50以上	7	0	5	5	3	4	2	3	7	3	2	7
合計	14	5	16	17	8	10	8	9	17	17	2	15

たその独善が省みられる。

しかし、今こそ、それぞれの「教室」が、「現代国語」・「古典」の体系のもと、その重い実践の中で培ってきた力量を、「国語Ⅰ」の出発において、具体的に提起し合わねばならない。沈黙が、共犯とならないためにである。それゆえに、わたしは、この報告を通して、わたしの「独善」に対する多くの批正・反発を求める。と同時に、「教室」に立ち返って、この「独善」を、学習の場において、謙虚に吟味しつづけたいと思う。教えられたい。

五　「教室」からの声

なお、全体については、つぎのような多くの高見を賜わった。教えられるところ大きい。

(1)　本校では、卒業後、就職希望者が多く、学年を経るに従って、古典を必要とする生徒が少なくなる一方、新課程になってから減単位になりまして、より古典軽視の傾向が強くなっております。そういう点でも本校では旧課程の指導体系をそのまま踏襲しております。よって、新課程の大きな特色である〝融合教材〟を授業ではとりあげておりません。また、最近、古典を現代国語のように、内容重視で読みとっていくという傾向がありますが、それでは、古典を一人でよんでいくという力はつきません。古典の学力が今以上におちていくのではないでしょうか。(二〇代)

(2)　現代国語の目的と、古典学習の目的は異なるような気がして、安易な統合には反対です。古典学習にはそれなりの下地の養成かしか得られていない。ちなみに、この項については、意見もが、ほとんどなかった。

「古典」を、「国語Ⅰ」の中に、どう「総合」すべきなのか。――この焦眉の急の課題に対して、わたしたちの「教室」は、出発した今においてさえ、確たるものを持ち得てはいない。右の提案も、ま

が必要だろうし、それがあってはじめて、文化享受が全ての人間のものとなると思います。一方、「現国」では、一定生徒が既に持っている言語能力を前提に「ものの考え方・見方」を伸ばしていくものだと思います。(二〇代)

(3) 一学期を終えた今、古典（特に古文）に関してふりかえってみると、時代背景や状況という点で現国教材や他の古典教材と同じ基盤に立って教えることができましたが、それが従来のやり方と比べてすごく効果があったかというと疑問です。「国語Ⅰ」の内容もさることながら、授業の担当の仕方がそれ以上に問題になると思われます。(三〇代)

(4) 古典教育の最大の問題は、検定教科書において教材が画一化していることである。「日本人の心」が、貴族や武士や僧侶（インテリ）の心と同一であることが問題である。民衆の心や生活がつかめるもの（「今昔物語」や近世西鶴など）をもっと教材化すべきである。(三〇代)

(5) 本当のことを言いますと、私の高校では、教科書や高校における〝言語の教育〟とは、まったく無縁です。教科書を持って来る生徒が何人いるでしょうか。古典は、懇切丁寧な現代語入りのプリントを使い、現代国語では、高校三年でも中学や一年の教科書から短かい文章を選び教材をつくらなければ、授業になりません。小学校の基礎がない生徒に、高校の教科書を使うことに、憤りを感じています。(以下略)(三〇代)

(6) 私見では、現国の教材はあまりにテーマなど分化しすぎたきらいがあり、教授者も全体をおしえるだけの力量・時間ができないと思われる。例えば、「古典」…明治までを含む…を教える立場をもっと重視できないものだろうか。(以下略)(三〇代)

(7) 〝現代を生きる生徒に役立たなければ古典の意味はない。〟〝役立つ〟という観点の整理をしなければならないが、大学入試にしばられて現場の教師は〝人間教育〟（教材を通じて人間の生き方をさぐる）時間が少なくなってしまうのが現状である。(三〇代)

(8) 古典を国語の中の一つととらえて現代国語との関連の中でとらえたいという気持ちもあるが、受験に耐えうる古典の実力もつけてやらねばならないと思うと、仲々国語Ⅰの方向に行けないというのが現状です。(四〇代)

(9) （前略）国語Ⅰについての思いは小生も諸先生方と同じでございました。しかし、後期中等教育の大衆化時代を迎え、私の考えは変わりゆこうとしており、今の時点での回答に責任がもてませんのでせっかくの御配慮ですが遠慮させて頂きます。君子に三楽ありとか申します。(以下略)(四〇代)

(10) 五里霧中の進行中で、期末考査採点がやっとの忙しい中、立てつづけの質問には参った。(中略)「その他大勢」の答しか送り得ぬことをはずかしく思う。しかし、「その他大勢」の意見こそ、大切にして頂かねばならぬことを申し添えておきましょう。〈あくまで個人的な意見であって、本校国語科としての意見でないことだから、慎重に扱ってほしい。〉第〇学区の〇〇高校の意見という扱い方はしてほしくない。(五〇代)

(11) 小生は、今年度は新課程の授業をもっておりませんので、体

験的な話ができません。ただ、私見としては、総合の形態を保つべきであると考えます。古典をことさらに分離して、生徒に古典＝外国語のような受けとり方をされるのは、日本語の不幸であります。教科内で本質的な話し合いができていないので、惰性的に現・古分離形式になってしまいましたが、やはり綜合の形でのあり方を模索しなければならないと思います。(五〇代)

(12) 無回答が多く申訳ありません。新設校の現場では、上記のような問題意識は、もついとまがありません。(五〇代)

このアンケートについては、右の他にも、多数の添え書きによるご意見・ご批正をいただいた。わたしは、これら先達の、それぞれの「教室」での実態をみすえた高見に、本報告の標題に対する誠実な回答の縮図を見る。そこには、「国語Ⅰ」の出発にあたっての「古典」のありようとあるべき姿への思いが、深い。

わたしたちは、国語教育前進の契機でなければならない大きな節を、すでに迎えている。今こそ、右のようなさまざまな視点からの「教室」の声をまず結集するところから出発して、この契機を生かし切らねばならない。本報告は、それへの呼びかけの一つである。

おわりに

「国語Ⅰ」の出発にあたって、とまどった。諸賢の「教室」は、どのように出発したのか。教えられたい。そんな切実な思いから、アンケートの筆を執った。七月初めの日であった。

安易なとりくみのためであったのだろう、思いの外に回答は少なかった。厳しいご批判をも賜わった。しかし、わたしは、それによって、自らの「教室」のありようを反省するために、多くの柱を確認することができた。

それをとりまとめたのが、本報告である。報告の折にも、わたしは、協議会参加諸賢の、切実に「教室」を思い、わたしよりもはるかに熱い心を込めて「教室」をみすえつづけての発言に接しえて、自らの安易さを恥じた。

今、「国語Ⅰ」定着の年の初めに至って、諸賢によって省みさせてもらえたひとつひとつのことがらを、「教室」のひとりひとりから新しい力を引き出すための、わたしの力の支えとしつづけたい。諸賢に、記して感謝をしたい。

注1 「高等学校の国語科古典と現代国語」(『実践国語』一九六二・三)

2 拙稿「わたしの『国語』教室――主題による統合の試み――」(『国語教育研究』第二六号一九八〇・一一・四)

3 たとえば、川本信幹「中高、地域の中での教員の交流を」(口頭発表。於日本国語教育学会・神戸大学教育学部・一九八二・六・六)が、東京都立国分寺高等学校を中心とした実践を報告している。

4 益田勝美「古典教育とよばれるもの」(『文学』1981.10.VOL.49)

5 注2に同じ。なお、具体的な実践報告としては、拙稿「『理解』と『表現』の統合――宇治十帖の端役たちの教材化を通して――」(『国語研究土曜会紀要』創刊号一九八三・一〇・一五)がある。

(一九八二・八・三一初稿)

(一九八三・一・六改稿)

(大阪府立豊中高等学校教諭)